



恩師からの便り Message

若き日のわれらが

授業、ホームルーム、進路指導

困らせたり、怒らせたり・・・

時には先生を中心にクラスが一つになって・・・

懐かしいあの日々――

心の拠りどころとした先生方から

温かいメッセージが届きました。

あれから二十年

作山 英雄
(昭和四〇～四九年)



昭和四十五年の卒業生は、平成五年、創立百二十周年の折にも幹事学年でした。その時には部活動(演劇部)の思い出を寄稿しましたが、今回は二十年後の、現在の老生活(八十一歳)を報告し、これから高齢者になる若い人たちへの、参考に供したいと思えます。

公立高校退職後の五年間、私立大垣日大高校に勤めました。そこを退職した三月、四月からどういう生活をしたらいだらうかと迷いました。私は高校生の頃、書道部に入学していましたが、途中でバスケット部に転部し、書道を途中で投げ出していました。「そうだ。あの書道をやろう」と、文字通り六十の手習いを始めました。いつこうに上達しませんが、現在も続けています。

その翌年、新聞広告にあった「中

高年の水墨画・日本画」教室の募集を見て、後先も考えずにとびつきました。私は、絵は美術館などで見るもので、自分で描くなどということは思ってもいませんでした。

旧制中学に入学して間もなく、図画の時間に、担当の先生から、「作山、おまえはどういう目をしているのだ。どこもかしこも真っ黒にしてしまったな。この像がそういう風に見えるのか」と、こっぴどく叱られました。それ以来、絵は絶対に描くまいと誓ったのです。よく、褒めてやらなければ、その子の良さは育たない、叱ってはだめだと言いますが、私には、それが当てはまるように思われませんでした。それ以来、美術展にはよく出かけますが、自分で描こうなどとは思ってもみませんでした。新

聞のチラシの「中高年の」が、私には不思議な魔力・引力でした。今も続いています。書と絵、この二つは、体が動く限りは続けていこうと思っています。

もう一つは読書会で、今年で十五年目になります。大垣の地区センターの一室を借りて、高校を退職した仲間と日本の古典を読んでいます。今は、江戸時代の俳人横井也有の『鶉衣』です。最近、私はうまく呂律が回らなくなり、レポーターの時はなかなか大変ですが、何とか比較的元気に過ごしています。九年間、図らずも岐阜高校の教員であった縁に感謝し、岐阜高校、岐阜高校同窓会のみますの発展を祈念して已みません。



岐阜高校の離任式

大矢 邦彦
(昭和四四〜五四年)



昭和五四年四月十四日は岐阜高校職員の離任式でした。五年間を校長として勤められた堀房夫先生

が、県教育長としてご栄転になりました。その離任式でのご挨拶の録音テープが私の手元にありません。私もこのとき離任しまして、同僚たちが寄せ書きを添えて、私の挨拶の録音とともに記念にとプレゼントしてくれたからです。堀先生のご家族のお許しを得て、ここにご挨拶の要旨を掲載いたします。その時在籍していた同窓生の方々は、この時の情景を呼び戻し、岐阜の青春時代に思いを馳せていただければと思います。

《久しぶりに元気な諸君の顔を見て嬉しく思っています。最後まで母校の校長として勤める心算でいたのですが、図らずも転勤ということになりました。「人生とい

うものは自分の思いとは異なる方向に進むものだ」と痛感しております。

私は常々、いろいろな機会に繰り返し申ししてきました。「人間は学力だけが全てではない。基本的な力としての体力・社会生活をしていく上での協調性・更には判断力・決断力、ときには、指導力・統率力なども要求されてくる。高校生活は、将来のためのこうした能力を培う修行の場である。身を屈めて大きく羽撃いていくための修養の時期である。勉強は勿論のこと、部活動にもその他の活動にも、その時々々に努力して自分自身を鍛えあげて欲しい。岐阜高校百余年の伝統の中で育まれた校風に誇りを持ってがんばって欲しい」と。

再び母校の教壇に立つこともな

いかと思うと寂しくもあり胸も一杯になりますが、幸い最も尊敬している幸脇校長が着任されました。その下に、岐阜高校がますます発展していくことを祈念し、諸君の健闘を期待して簡単ではありますがご挨拶いたします。》

在職の頃、歴代の校長の「講話集」などもあればと思っていました。今、私は堀先生のテープを聴いて感激しています。生きていく力を頂いています。私は岐阜高校の十年を中島周一先生、佐光義民先生、堀先生の三人の大校長の下で勤務させて頂きました。大校長の下で勤務できる教員は幸せ者だと思います。私は、その幸せ者です。そのことに感謝しておる昨今です。岐阜高校の創立百四十周年を迎えるこの記念すべき時に、一文を寄せる機会を与えられたことを光栄に思い感謝しています。最後になりましたが、岐阜高校同窓会の益々の発展と会員の皆様のご健勝を祈念いたします。

意識する

伊藤 秀幸
(昭和三三〜四七年)



八十歳の同窓会の席で、しきりに頭をたたいて独り言を言っている者がいた。老化防止のため、「それは駄目、こうするんだ」と自分の脳に言って聞かせていると言う。若いうちは自然にできていたことも、意識しないと次第に機能を失っていくからである。

小学校の頃、体操の時間に「臍へし下丹田、臍下三寸へししたさんすんに力を入れよ」と、号令を掛けられた。座禅や武道でも臍下丹田に気を集め、散らさないように意識し、修練を重ねる。

三・一一の東日本の大災害が起き、福島原発事故を誘発したが、これは天が人の奢りを諫める啓示ではないだろうか。遺伝子操作、クローニング、iPS、原子力など使い方によっては神の領域を犯し、滅亡につながるかねない行為

に対する警告で、人類の将来を考えよと言っているのである。

そしてその民族に、温和な性質で高い知性と思考力を持つ日本人が選ばれたのである。未だに蝸牛角上で争っている人達もいるが、何百年後か分からないが世界は一つになり争いをなくし、合衆連合体国家を創るしか道はない。それには一人の救世主の出現を待つのではなく、一人一人のDNAがそのように変わらなければならぬ。

一人の母親から生まれた人類は、人口増加に伴い各地に移動分散し、その外部環境に適合するよう少しずつ形態に関わるゲノムが変化し多くの人種が出現した。それならば、心が作る内部環境を整備し続けられれば精神活動を司るゲノムも変えられるのではないか。

私利私欲を持たず、世のため人のため尽力する人間となり、争わない、殺さない、盗まない、欺かない、嘘をつかない、悪口を言わないと常に意識し続けること。そうすれば刻々新陳代謝している四〇兆個の細胞のDNAは少しずつ変化し、より高い精神性をもつ人類の出現につながるであろう。

「意」の文字は、心を抑えとどめている形を表す。気を散らし、心を乱すものから遠ざかろうとする意識が大切であり、特に幼時から、悪に対して見ざる、聞かざる、言わざるを徹底し、善については代表的人物の善行を読み聞かせることである。



四十年前のあのころ

辻村 秀夫
(昭和四四～四九年)



私は、昭和四四年春から四九年春までの五年間、「生物」担当の教員として岐阜高校に勤務しました。短い期間でしたが、この間、大きな出来事がいくつもありました。

【1】「生物」の授業

昭和四四年頃は環境汚染が社会問題となっていて、長良川が白濁し、教材用カエルが入手しにくくなっていました。遺伝の授業ではメンデルの「遺伝の法則」が中心で、DNAの時代はやっと始まったところでした。

【2】「山の家」での林間学習

夏休みに入ると一年生全員が、完成したばかりの立派な岐高「山の家」で三泊四日の研修に参加しました。中尾峠までの登山、ロープウェイ駅下付近での飯盒炊さん、夜のキャンプファイアーや学

舎近くの露天風呂で男子諸君と楽しく過ごしたなどが思い出されます。

【3】大阪万博への遠足

昭和四五年春の遠足は、全校で大阪万博見学でした。会場は大変な人出で、どのパビリオンも何時間もの待ちでしたが、岡本太郎作の巨大なシンボルタワー「太陽の塔」が今でも目に浮かびます。

【4】体育館の新設と百年祭

昭和四七年には体育館の新設工事が始まりました。授業中、騒音に悩まされた記憶があります。四年には新設された二階建ての立派な体育館を会場に百年祭が催されましたが、列席者に多くの年輩者が見受けられ、歴史が感じられました。

【5】「学校群制度」と教員異動

昭和四九年度春には新しい学校群

制度に先立つ大規模な人事異動があり、多くの先生方が岐阜高校を後にされました。私もその一人でした。

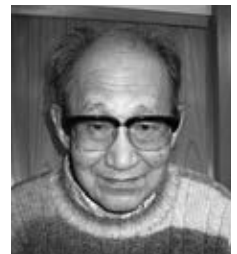
あれからもう四〇年。今は新しく立派な校舎になっているようですが、私にはあの当時の岐阜高校が大変懐かしく思い出されます。

今年、一四〇周年を迎える岐阜高等学校の益々の発展を祈るばかりです。



なるようにしかならない。 でも、何とかなる

（昭和四二〜五一年・五三〜五五年・六〇〜六二年）
富成 侑彦



「別解の先生」。これが、岐阜高校で数学を教えていた時の私に付けられた呼び名でした。教師は教科をどう教えたらいいかを常に考えているものです。岐阜高校に初めて着任したときの課題は、岐阜レベルの授業をどう作り上げるかということに加えて、基本的な解き方を教えるときすぐそれを使って答えが出せる生徒に何を教えるかということでした。そこで出て来た授業方法は、基本的な解き方以外にその問題を解く方法がないかを考えるというものでした。数学の問題に答えは一つでも、そこにたどり着くまでの方法は一つではないということ、あれならどうかこれならどうかと考え苦しんで新たな解法を見つけた時にこそ数学の喜びがあるということを、岐阜高生ならきっと分かってくれると

思ったからです。予想通り、生徒はいくつもの別解を考えつき、中にはすべての問題の別解を考えて来る生徒も出て来ました。このような授業は教師を興奮させるものです、しかし同時に教師も真剣に勉強しなければ授業が成立しません。専門分野において教師はどんな質問にも答えられる、生徒と比較にならないほどの知識を持つべきです。その意味で、様々な別解を出して来る生徒と創っていく授業は、私にとって他校では得られない貴重な研鑽の場となりました。

現在の生活は穏やかなものです。午前中は般若心経を書き写し読経します。写経は昭和五十年三月一日から今日まで一日も欠かさずに続けてきました。はじめは卒業生の無事と希望校入学を念じて

のことでしたが、今では私が心身ともに功徳をいただいております。午後は数学の力を保持するために高校数学の問題を解きます。これがささやかな数学教師である（あった）ことの証なのかもしれません。

卒業生の方々はそれぞれの場所で立派に生きていらつしやるので、こうあってほしいなどと望むことは何もありません。ただ私は、「なるようにしかならない。でも何とかなる」と思って今を生きています。



最も長く勤めた岐阜高校

日比野 安平
(昭和五四年〜平成元年)



二十歳代を郡上高校で、三十一歳(昭和五十四年四月)から四十四歳(平成元年三月)までの十年間を岐阜高校でお世話になりました。

三十代での勤務ですから、教科指導とクラス担任と部活動に集中しておれば良いという、誠に絵に描いたような楽しい教師生活で、生徒諸君とひたすら遊んでいたような毎日でした。

私の授業中の脱線話が岐阜祭の文化祭で「安平氏物語」として何年にも渡って作り続けられ、最早担任のチェックなどお構いなしの、手の届かないところへいつてしましました。ある時、生徒諸君に、岐阜駅のコンコースや出入りする車両の一部を、三時間ぐらい撮影場所として借用できるよう、駅長さんに掛け合って欲しいと頼まれました。その熱意に押し切られて、

ダメ元でお願いしましたら、予想に反して貸して頂けることになり、逆に驚いたことがありました。大らかな国鉄時代であったことと、なんといっても岐阜高校の信用のなせるところだったと思えます。当時、出入りする本数の比較的少ない、高山線のホームとディーゼル車両を借りました。頻繁に出入りする向かいの東海道線の昇降客達からは、奇異の目で見られていました。

この文化祭に関しては、クラスを幾つかの班に分けて、様々な風を造り、グラウンドや長良川河川敷を使って、真つ青な秋の空へ揚げた気持ちよさも忘れられません。クラスの人数分の連風や畳二畳分ほどの大風、海王丸やセントマリア号などの帆船風、幾何学模様のボックス風など、見事としか言いようのない素晴らしい作品が秋の

空を彩りました。堤防を通っていた民放送局の取材チームが何事かと河原まで降りてきて、突然の取材を受けたこともありましたが、その時の作品の海王丸は見事なもので、そのまま廃棄するにはあまりにもつたいないということ、長い間校長室に飾られていました。クラス演劇等も忘れられない思い出です。

部活動での思い出はなんといっても、男子団体戦で全国制覇した囲碁将棋部の思い出です。県下で十連覇を果たし、東海大会でも五連覇し、名古屋までの駅の伝言板に書いてある「打倒！岐阜高校」の落書きを見ながらの会場入りは、格別でした。会場入りして、各チームのキャプテンがトーナメント表のクジを引き、自分のゾーンに岐阜高校の名があるのを見て、ため息を漏らす学校が増えてくるようになると、試合をする前に既に勝ったようなものでした。岐阜高校のチームには強い時には、県名人が二人も入っており、東海地方のどのような大人達のチームも岐阜高校のチームには勝

てず、練習相手に困りました。そのような時に、名古屋のプロの板谷道場の奨励会員(プロの卵達で、何れも各県のトップクラスの人達の集団)に相手をお願いしたこともありました。そのようなチームと戦っても、岐阜高校は勝ちました。

相手をしてくれた奨励会員達は、試合後に板谷先生から、アマチュアに負けるなんてと、強く叱られていたのが気の毒でした。

先般ご逝去された、東京都の教育委員を長く勤められた、米長邦雄日本将棋連盟会長には、殊の外お世話になりました。何千万円という賞金の懸かったプロの対局が、岐阜のホテルを会場に行われた時などは、高校生が過去に入ったことのない対局場に岐阜高校生ならと、入れて頂き、盤側で観戦したこともありました。

私が出版した本の序文を書いて頂いたり、名人就位祝賀会には妻共々ご招待頂いたり、米長先生が岐阜県で講演された時などは、声を掛けて頂きご一緒したこともありました。



同窓生寄稿

GIKO Days

卒業してからも何年経つのでしょうか

「高校生」のあの頃

青春を謳歌していたー

今、皆「大人」になって

それぞれのフィールドで

活躍しています

そんな同窓生からの便りです。

九十二歳を迎えて



私は本巣郡真桑村（現本巣市上真桑）に生まれ昭和十年四月岐阜中学に入学し昭和十五年三月第六十三回生として卒業しました。私たちが入学したときは、学校は京町にあり西本願寺の参道に面した西側、京町小学校の南隣で、校舎は五十年以上経った古い建物で日本最古の中学に相応しい物でした。三年間ここで学び昭和十三年四月今の大縄場に移転し、京町で三年大縄場で二年の中学生生活でした。在学中に支那事変が起こりだんだん戦時色が濃くなっていきま



翠 忠明
昭和15年卒

したが、まだ勝ち戦が続いていたので勉強やスポーツ活動には別段の制約もなく、楽しく充実した学生生活でした。

私は体格も良かったし走る事が好きだったので、入学すると同時に陸上部に入りました。練習は大変厳しいものでしたが苦しい練習に耐え努力を積み重ねた結果、昭和十四年の全国中等陸上競技選手権大会の八百メートルで優勝することができ、一生忘れられない懐かしく思い出深い岐阜中学での五年間でした。

私たちが卒業した翌年に大東亜戦争が始まり、我々の年代の者は殆どが兵隊にとられ、私も昭和十八年十二月二十五日、学徒動員により岐阜の中部第四部隊に南方派遣要員として編成された歩兵第三十六連隊に現役兵として入営し、翌年の一月に南支の広東に派

遣されましたが五月、経理部甲種幹部候補生に採用され昭和二十年五月南京陸軍経理学校を卒業し名古屋陸軍糧秣支廠で会計監督官として勤務中に終戦を迎えました。

私が岐阜の歩兵第三百三十六連隊に入隊したとき同級生の松原淳一君や一年先輩の陸上部の渡辺光和さん三年先輩の高木正幸さんから十人以上の岐中卒業生が在隊しており、見習い士官の松原君や私の部屋の班長だった高木さんには特別に面倒を見ていただきましたが、私たちが南支に出発した四ヶ月後この連隊はサイパン島守備に動員され連隊がサイパンに上陸して間もなく米軍が上陸し七月中旬、全員玉砕したと聞きまことに痛恨の思いがいたします。

私は終戦後、昭和二十二年名古屋市職員に採用され戦災復興の根幹となる復興土地区画整理事業の事業開始から収束の段階まで二十七年間に亘り名古屋市の復興と街造りに携わり、昭和五十二年名古屋市港区長を最後に名古屋市を定年退職しました。

私が役所に入った翌年名古屋で

第一回全国高校陸上選手権大会が開催され、陸上OBとして運営に駆り出され、これがきっかけで昭和二十五年の第五回国体陸上競技の事務局長をやり、以来ずっと本務の役所勤めの他にボランティアとして陸上競技に関わり、昭和三十三年の東京オリンピックには陸上競技役員として大会に参加しましたし、昭和四十年の第二十回岐阜国体にも陸連から派遣され競技役員として運営に協力しました。長年日本陸連の理事や東海の理事長なども務め、現在も幾つかスポーツ団体の顧問などとして行事に参加しております。

私たち六十三回生の消息は、戦争に続く戦後の混乱のため長らく途絶えておりましたが、岐阜在住の方々の努力により、終戦後の昭和二十一年二月三日卒業後始めての同窓会が開かれ十八名が出席し久しぶりに懐かしい旧友に会え有意義な会でした。その後は暫くづランクがありました。昭和三十一年、名古屋市の工業高校の先生をしていた宮部君と私で、簡単な名簿を作成し同期生に配布しまし

た。これを機会に六三会ろくさんかいと名付け二〜三年おきに同窓会が開かれるようになり、昭和三十六年からは殆ど毎年開催され当番幹事がその都度、名簿を加除しておりましたが、消息の分からぬ者がまだ多数おりました。昭和五十五年の六三会に出席していた鷹森二郎君が長年勤めた中日新聞社を定年になり引き続き嘱託として勤務しているが、時間的に余裕ができたということで翌年の幹事に指名され、彼は翌年の六三会までには是非新しい名簿を作りましょうと長年にわたる情報収集の経験を生かして最新の消息を集め、昭和十五年三月卒業の百六十六名と卒業前に進学した者など二十四名をあわせて百九十名の名簿を作成してくれました。その後も彼は常に会員の消息収集に努め毎年の六三会にいろいろの情報を知らせてくれています。鷹森君は長年にわたり戦没した同期生の戦死の状況などの資料を求め、遺族を訪ねたり厚生省や県庁、市町村役場、更には靖国神社などにも照会したり関係者に面談して、三十三名全員の戦没の年月日、場

所、所属、階級など詳細を把握し調査結果の紹介を含め平成十年改めて六三会名簿を作成してくれました。この頃は肺機能の低下で酸素ボンベを携帯しての活動で彼の努力には本当に心から感謝いたしております。六三会は毎年欠かすことなく開催されてきましたが、年齢が加わるごとに参加者が減り一昨年は八名で、五十年以上開催してきた六三会を昨年取り止めにになりました。

私は岐高の同窓会には平成二年以来殆ど毎年出席してきましたが、今年九十二歳になりますのでこの際、中学卒業以来の簡単な経歴と六十三回生の同窓会の経過などを記述し寄稿しました。

酒の味

柳ヶ瀬に近い酒屋に生まれ酒に囲まれて育った。父の店に並ぶウイスキーやリキュールの色とりどりの美しさに魅せられてごく自然に、酒をつくりたいと思い始めた。高度成長の真っ只中、年を追ってモノが満たされて行く中で、何故かモノではなく夢をつくる世界に憧れた。大学は醗酵工学科を選び、洋酒（死語？）メーカーに就職。担当させてくれたのがビールの醸造だった。今から三十数年前のことだ。その後四半世紀の間、各地各国のビール工場で醸造技師としてビールづくりとその技術開発の仕事を経験した。

その仕事に就いたころと較べると、現在は生活の中の「酒」の役割がずいぶん変わったように思う。少なくとも今は酔っぱらうための飲酒はなくなり、酒は豊かな生活を演出する役割を担うことが



垣見 吉彦
昭和45年卒

多い。その中でビールは、とりあえずビールで始まるコミュニケーションのツールとして、また食事と他の酒への導入が一般的な役割の認識であろう。このような生活の中での役割の変化とともに、酒の味は常に変化を続けてきた。どの種類の酒も近年の嗜好の傾向は重厚感より、軽い飲みやすさ、口当たりの良さであった。ビールも同様にスッキリした飲み口が嗜好の中心となった。

そんな嗜好の大きな方向の中で、さすがに日本の伝統酒である清酒の先進的な蔵元がいち早く、本質に回帰すると言う意味で新しいと言える酒の味の方を示してくれた。「芳醇旨口」の酒である。これが私を含めた日本のビール醸造家達にとっても一つの刺激になったように思う。昨今の日本の市場で、芳醇なビール（いわゆる



プレミアムビール)が提案されて、一つのカテゴリとして認知され始めた。ビールの本質の味を楽しんでももらいたいと、酒づくりに情熱を傾注してきた者として、このことを本場にうれしく思う。坂口謹一郎博士の名著「世界の酒」の序文に、「酒は生き物が造り、

その上に人間という微妙なセンスの動物が鑑賞するのであるから、今の科学にとってこれほど手ごわい相手はたくさんはない。」とある。今、改めてこの文章の意味することを想いながら、新たな夢を消費者に送り続けたいと願っている。

重力とは何か



大栗 博司
昭和55年卒

私は岐阜高校を卒業してから、物理学を学ぶために京都大学に進みました。現在は米国のロサンゼルス郊外にあるカリフォルニア工科大学で、理論物理学、特に素粒子論の研究と教育に携わっています。カリフォルニアに住むようになってから二〇年になりますが、この数年の間に日本に行く機会が増えました。

二〇〇七年の春には、研究休暇をいただいて東京に数ヶ月滞在する機会があり、久しぶりに日本の

桜を満喫しました。このとき、東京大学に私の研究分野に関係した研究所を設立する計画が持ち上がり、私もその立ち上げに参加することになりました。「数物連携宇宙研究機構（IPMU）」と名付けられたこの国際研究機関では、私たちが住むこの宇宙についての根源的な疑問に取り組んでいます。

- 宇宙は何でできているのか。
- どのようににはじまったのか。
- どのような運命を迎えるのか。

● 私たちはなぜこの宇宙に存在するのか。

という、人類に共通の問題に答えようというのです。

この研究所ができてから、ロサンゼルスと東京の二ヶ所で研究を行うようになりました。二ヶ月に一度は東京に行くので、月と地球を往復するほどの距離を飛行したことになります。

日本に定期的に戻るようになってから、科学解説記事の執筆や一般向けの講演など、いわゆる科学アウトリーチを行う機会も増えました。ブログなどソーシャル・メディアを通じた発信もしています (<http://planckexblog.jp>)。

このような活動の一環として、昨年五月に幻冬舎新書より科学解説書『重力とは何か』を上梓しました。

重力は、私たち自身や私たちの周囲にあるすべての物を地球につながる力です。誰でも日常的に感じている力ですが、あらためて考えてみると不思議な性質がたくさんあります。

また、重力は、現在の宇宙の姿とも深く関わっています。宇宙は、今から一三七億年ほど前に生まれたと考えられています。しかし、もし重力の働きが少しでも違っていたら、宇宙は生まれたと思っただけで重力の重みで瞬時に潰れてしまったり、また逆にあつという間に膨張して冷え切ってしまった、生命はおろか星ができることさえない、暗い虚無の世界が永遠に続く世界だったと考えられています。宇宙が長い時間をかけて星や銀河を作り、私たちのような生命体を生み出すことができたのは、重力が「ちょうどいい強さ」だったからです。

昨年ヒッグス粒子が発見されて話題になった素粒子物理学の最先端の問題を解くためにも、重力の理解が欠かせません。重力の性質は、私たちが東京大学の数物連携宇宙研究機構で解明しようとしている宇宙の深遠な謎や素粒子の世界の基本法則とも深く関わっているのです。

このような浮世離れた話題についての本でしたので、どれだけの

方々に興味を持っていただけるかもわからず、出版の担当者にも、「こんな本を出しても大丈夫ですか」とお聞きしたほどでした。おそろおそろ世に問うてみると、理系の本としては異例の十五万部を超え、朝日新聞や日経新聞をはじめとする新聞書評や、文藝春秋や中央公論をはじめとする雑誌書評にも取り上げていただきました。基礎科学に興味のある層の厚みを感じました。

この本を読んでくださった方の感想の中で、よく取り上げられていたのが、あとがきの次の部分でした。

「本書を書くときに思い浮かべたのは、卒業以来会っていない高校の同窓生でした。私とは違う道に進み科学からは遠ざかっているものの、好奇心は相変わらず旺盛で、筋道だつて説き起こしていけば理解してくれる。そんな友人に三十年ぶりに再会して、私が大学で勉強し、大学院で研究を始め、今日まで考えてきたことを語るつもりで書きました。

久しぶりに会ったので、一緒に勉強

強をした高校の理科から話を始めます。しかし、説明を簡単にするためにごまかしてはいけません。大切だと思うことはきちんとわかっ

てもらえるように、すこしぐらい話が長くなっても丁寧に説明しました。皆さんも本書を読んでいくと、今まで聞いたことのない概念に出合つて、時には立ち止まり、本を伏せて考えをめぐらせなければいけないところもあるかもしれません。そうして新しい考え方を理解したときに、世界の見方がこれまでと少し変わって見えるような気がしたら、私がこの本を書いた意図は達成されたことになります。」

人生の大切な三年間を一緒に過ごした旧友と、久しぶりに会つて語り合うというスタイルで書いたことが、読者の共感を呼んだのかも知れません。

湯川秀樹先生がおっしゃったように、物理学の研究は地図を持たずに旅行をするようなものです。果てしない砂漠をオアシスを求めてさ迷い歩いているようなときには、「学海の波荒くとも、希望の岸

遠くとも、華陽の健児心雄々しく、

百折不撓勤めてやまず」と唱えながら、研究を続けてきました。希望の岸まではまだ遠い道のりですが、志を曲げずに、自然界の最も深い真実を見極めようと努力しています。

平成二年卒業生を代表して

平成二五年度岐阜高等学校同窓会総会運営委員会の副委員長を務めさせて頂く事になりました。学生代表が何故おまえなんだ?と思う同級生も少なくないでしょうから、高校卒業後の私の近況から書かせていただきます。大学進学後、東京で大手損害保険会社に入社し、各地を転勤しながら九年半勤め、平成十六年に実家の保険代理店業を継ぐために岐阜に戻りました。もう岐阜に戻って九年目ですが、父(昭和三三年卒)と母(昭和三四年卒)が毎年この同窓会総会に参加していましたので、平成十年

今年の一月には、幻冬舎新書より、ビッグス粒子発見の意義について解説した『強い力と弱い力』を上梓しました。『重力とは何か』とともに、こちらもお読みいただけるとうれしいです。



西澤 征平
平成2年卒

度から約三年間は同窓会総会にも参加してみました。そこで会えた同級生は数名だけでしたが、同窓会総会でお会いした先輩にお誘いを頂き、ここ六年間は地域のまちづくり団体に入会し四十歳で卒業するまで、青年経済人の仲間たちとぎふのまちのために、ひとづくり・まちづくり運動にも汗を流しました。

私の高校時代を振り返れば、ドラムチックでしたし、若さからくる青さというか、まっすぐだったから痛々しい波乱万丈の三年間でした。遊びたい・恋愛もしたいとい

う多感な時期に、岐阜高校に入れた事で満足してしまっただけでしょうか、入学して目の当たりにした同級生の『真面目さ』に少々引き気味だった私は、岐高生へのコンプレックスの塊りのようだったと思います。社会に出たら人間性で勝負するのだと言い聞かせ、真面目に勉強する事の意義を見出せず悶々としていました。案の定勉強は全くついていけず、一年生から三年間成績は学年約四五十名の中で常に四四〇番台でした。それでも『勉強以外は絶対に負けない』という妙なプライドから、体育や音楽だけは良い成績をもらっていました。昼休みは五分以内で弁当を食べ終え、(数ヶ月のうちに『早弁』なるものを覚え、昼休みはみっちり遊んでいたはずです。)グラウンドや体育館で汗だくになって遊んでいたのも良い思い出です。

一年生は部活動にも向き合う事ができず、放課後はボーリング場やビリヤード場をうろうろしていました。生徒指導室にも何度となく呼ばれ、先生に「お前このままでどうするんや!」とこっぴどく

叱られた事も覚えています。一年生の秋頃、見兼ねた両親が私を全身全霊で叱ってくれました。その甲斐あって、せめて部活動だけは真剣にやり抜こうと決意する事ができ、真剣に剣道と向き合い日々稽古に励みました。二年、三年と進んでも勉強はせず、それでも剣道だけはやり続けました。自ら志願して剣道部のキャプテンも務めました。強い同級生や先輩や後輩に恵まれた剣道部は、仲間と切磋琢磨した練習の成果が実り、三年生の春の県大会(団体戦)で優勝する事ができました。当時は市岐商・県岐商・加茂高・八百津高・中京商業など、岐高生の勉強時間以上に練習している強豪高にせり勝って優勝できた事は今でも誇りに思いますし、進学校ながらスポーツで優勝旗を持って帰れた事で、岐高生としての自分が少し報われたような気がしました。

そんな流れで進学する予定でしたが、受験ではひと波乱あって、指定校推薦をいただきながら、不合格という前代未聞の事態に陥りました。「ツキもここまでか。」と

急に将来が不安になりましたが、今思えば「そんなに人生は甘くないんだよ!」と教えてもらった貴重な経験です。開き直って一念発起し十二月に受験勉強を開始しましたが、二ヶ月余りで三年分の勉強を取り返せる訳もなく浪人生活

故郷を思ふ

岐阜高校を卒業してからも四十年以上過ぎた。父親の転勤もあり卒業以来戻ることなく大阪、東京と住まいが変わった。故郷は遠くにおいて思ふもの、そして悲しくうたふものと。

今は、新幹線で東西を移動するときに、車窓から遠く金華山をのぞみ生まれた故郷を想う。今見る景色はあのときと何ら変わる事もなく、長良川の流れも静かで穏やかだ。故郷はあの時のままであり、時を経て水の流れも変わることなく悠々としている。かつて週刊

を送りました。この経験がなかったら、人生や社会生活をナメてしまっていたのではないかと思えます。浪人生活を一年で終え無事に大学に入学し、卒業できました。その後の人生は冒頭の通りです。



安藤 圭一
昭和45年卒

誌の表紙を飾った谷内六郎のふるさとの原風景そのままだ。その表紙絵は我々に故郷への憧憬と懐かしさを抱かせる。まさにノスタルジーの世界。

でも、その様な甘美な感覚だけではない。重く鉛色の空に閉じ込められた、時代の流れに取り残されたような一種の閉塞感そして寂寥感もなぜか感じる。

あの頃の自分と今の自分とうまく結びつけることができない。過ぎ去ったあの頃を自分と一緒にそのまま残し、異次元の世界が変わ

らずにそこにある。このかけ離れた、断絶した感覚、この錯綜した感覚をどのように説明できるのか。そこで線はぷつんと切れてしまう。故郷はあの頃の私をそこに残したまま、包み込んだまま、あたかも一枚の絵を見るようにそこに静かに佇んでいる。

東京と大阪を仕事で何度も移動しているが、日々刻々とめまぐるしく変化している世界や現在の仕事とは全く遠くかけ離れた、あの頃の世界が意味をひそめてすぐそこに存在している。慌ただしいビジネスの世界で、恐らく私の中で永遠に交わることのない今と過去との時間軸がそこにある。

これは、世の中すべてのものに対して正義感と反発心が鋭く葛

笑うヒマラヤ

千仞の嶽 金華山、百里の水
長良川ならぬ、世界最高峰エベレ

藤していたあの頃の、透徹するまでの澄み切った純粹さへの精神的なうしろめたさなのか。戻ることも、取り戻すこともはやでできない多感なあの頃の自分、ピーンと張りつめた精神性、心情、研ぎ澄まされた感覚、これらが車窓の景色とともに瞬間的に呼び戻され、心の疼きと痛みを感じさせるのか。

そうかもしれない。故郷は逆に移り変わる自分、今を、じつと向こうから静かに見つめているのだ。立ち止まって振り返る余裕さえない自分を、時間を止め音のない静寂な暗闇の中に引き込み、現在から遮断されたあの頃の世界に引き戻すのだ。



原 康子
平成2年卒

スト、聖なる河ガンジスに続くバ
グマテイ川を有するネパールから

お便りしています。ここ首都カトマンズからも、晴れた日には標高七千メートル級の神々しいヒマラヤの雪山が望めます。

さて、岐阜卒業（平成二年）から二二年後の昨年、私は岐阜に里帰りをしておりまして。といっても私自身ではなく、私の「文章の里帰り」です。岐阜新聞に、私が国際協力NGO「ソムニード」（高山市本部）の職員として、インドで暮らした笑いと涙の十年間のエッセイを連載させていただきました。岐阜市在住の同級生がこの連載を見つけてくれたのを機に、同級生をはじめ、諸先輩方とフェースブックを通じて再会でき、歴史ある本同窓会誌への寄稿という貴重な機会をいただきました。

各界でご活躍される諸先輩、同級生、後輩の皆さんが読まれるかと思うと、お笑いエッセイを得意とする私も緊張で、パソコンをタイプする手が震えます。しかし、震えているのは、寒さのせいでもあります。

水力発電がメインのネパールでは、乾季の十一月から五月、十分な

発電が出来ません。この間、一日平均約十四時間は停電し、ただ今も停電中。電気ヒーターが使えず、ガチガチと手を震わせながら（一月末で室温四度ほど）、原稿を書いております。電気がダメならガスヒーターと、景気よくガスを使い切ってしまうと、次のガス供給まで一、二ヶ月待ちという憂き目にも合います。

七年前、十年間に及ぶ内戦は終りましたが、政情は不安定で、諸政党による突然のゼネストも珍しくありません。農業が主な産業で、国内総生産（GDP）は、岐阜県の約六分の一（平成二三年のデータ）です。

道ばたやシャッターの降りた店先に座り、日向ぼっこする人々は、エネルギーに溢れています。大声で、笑い、争い、働き、子どもを育てます。経済発展とはほど遠いこの国は、資源には限りがあること、経済というもののさしぐ以外のものさしが無数にあること、子どもたちにどんな未来を残せるだろうか、そんなことを考えさせてくれます。

カナリア諸島から

郵便屋のパブロが、「あんたは日

本人か」と聞くので、そうだと



加藤 敦子
昭和45年卒



ヒマラヤ（カトマンズ郊外のナガルコットより撮影）



近所の風景・カトマンズ街角



ボータナート
(ネパール最大のチベット仏教の仏塔)

<プロフィール> 原 康子
昭和46年4月18日生まれ。平成2年岐阜高等学校卒業
平成13年～23年：
インド・アーンドラ/ブラデッシュ州ビジャカバトナム市に駐在し、認定
NPO法人ソムニード(本部高山市)の海外事業に従事。
平成23年～現在：
同NGOを退職後、連れ合いのネパール赴任に伴い、カトマンズに
て子育て&家事主担当、炊事副担当に従事。
平成24年1月から12月：
岐阜新聞にて「インド・オバチャン奮闘記」エッセイを計25回連載。
現在、出版準備中。

ヒマラヤに岐阜の山河を重ね、
ツラツラと考えているうちに、停
電時間が終わりました。電気があ
るのは今から二時間。掃除機をか
け、洗濯機、コピー機、電気ヒーター
の電源を入れ、パソコンを充電し、

最後にお茶を入れなければなりま
せん。夕日に赤く染まる雪のヒマ
ラヤは、こんな私を遙か彼方から
見下ろし、今日も笑っているよう
です。

答えると、「友達のグスタボが日本
語を習いたいと言っているので教
えてくれないか」と言う。そうし
て始めた日本語の個人教授を細々
と続けて早十二年。夫の天文台赴
任で、このカナリア諸島の中でも
最果ての島、ラパルマに来てから
十三年になる。グスタボから始まっ
て、口コミでアニメ好きの高校生
やら、柔道黒帯のイタリア人やら、
昔日本に行ったことがあるという
美術の先生やらがぼつぼつと日本
語を習いに来て、こんな小さな島
でも色々な理由で日本が好きなの
達に出会う。郵便屋のパブロは後
から知ったが、地域の活動家で、
福島事故の後、「原発反対集会
をやるからあんた達も来てくれ」
と言うので、この島にもう一人住
んでいる日本人のかつ子さんと応
援に行ってきた。このかつ子さん
と私が永らく「ラパルマ日本人会」
のただ二人のメンバーであったが、
最近になってもう一人、ドイツ人
と結婚している若い女性が加わっ
た。こう少人数だと年齢、バック
グラウンド関係なしに否が応でも
友達になる。前は島の洞窟に住む

ヒッピー(本人によれば「ナチュ
ラリスト」)のマサタカ、なんての
もいたが、グラナダにあるヒッピー
村に行ってしまった。

この島にいる外国人の大多数は
ドイツ人である。うちの近所にあ
る七軒のうち四軒はドイツ人の家
で、私は最近ではスペイン語より
ドイツ語が上達するのではないか、
と思うほどドイツ語を頻繁に聞
く。幸いうちの隣りのマノーラは
生粋のラパルマ人で、しかも九十
九%のスペイン人の例に漏れずお
しゃべり好きであるから、私は彼
女からほとんどのスペイン語を
習ったと言ってもいい。週に一度
だけ日本語を教えている私と違っ
て働き者である。しかしぐうたら
の私も庭にある八本のオレングジ
の剪定時には頑張つて働くのであ
る。そういえばまだマンゴーの剪
定が終わっていない。アボカドも
ある。なかなか忙しい(ときもあ
る)。

出雲大社と

スカイツリー 松明のリレー



金森 卓
昭和55年卒

司馬遼太郎氏に、「洪庵のたいまつ」という作品がある。もともと小学校五年生の国語の教科書用に書かれたものらしい。

世のためにつくした人の一生ほど、美しいものはない。ここでは、特に美しい生涯を送った人について語りたい。緒方洪庵のことである。この人は、江戸末期に生まれた。医者であった。かれは、名を求めず、利を求めなかった。あふれるほどの実力がありながら、しかも他人のために生き続けた。そういう生涯は、はるかな山河のように、実に美しく思えるのである。

という書き出しで始まり、洪庵の生い立ちなどを簡単に振り返ったうえで、適塾の様子を詳しく紹介する。そして、次のように結ぶ。洪庵は、自分の恩師たちから引きついでたいまつを、よりいっそう大きくした人であった。かれの

偉大さは、自分の火を、弟子たちの一人一人に移し続けたことである。弟子たちのたいまつは、後にそれぞれの分野であかあかとかがやいた。やがてはその火の群れが、日本の近代を照らす大きな明かりになったのである。

岐阜高校の同窓生には、医師、教師、科学者などが数多くいて、彼らもまた、先達から受け継いだ松明の火を後代へと移し続けているに違いない。誇らしく思う。洪庵や同窓生らによる松明のリレーという大きな流れに導かれつつ、私も一生活者として仕事や家庭を通じて力を尽くしている。

勤務先は、株式会社大林組。スカイツリーを施工した会社である。東日本大震災が発生したとき、スカイツリーは未だ建設途中にあった。最初の大きな揺れがおさまったとき、私はまず窓辺に駆けつけ、

遠方に見えるスカイツリーの無事を確かめ、ホッとすると共に大きく勇気づけられた。社員の多くが同じ思いであった。

そしてそのわずか七日後の二〇一一年三月一八日、スカイツリーは最高高さの六三四メートルに到達した。あれだけ不安に満ちた状況の中で、このことにさほどの意味はないとも言えよう。しかし一方、激甚災害に耐えてまっすぐ伸びるスカイツリーの姿に、希望の光を見た方も少なくはないのか。「そもそも必要なのか」といった懐疑論もあるけれど、スカイツリーは間違いなく時代を画する建造物である。そのうえたまたま建設中に大災害が起き、そして何事もなかったかのように無事竣工したことで、「次の世代に何かを伝えたい」というメッセージ性が一層高まったように感じる。この「何かを伝える」というプロセスに、建設業も深く関わっている。

今年、六十年に一度の大遷宮を迎える出雲大社。大林組は、一九八八年、「季刊大林」という顧客向けの広報誌で、「古代・出雲大社本殿

の復元」という特集を組んだ。現在の本殿は高さ二四メートルほどであるが、古代にはこれが何倍もの高さであったらしいということ、残存する図面などから検証する、という企画であった。

出雲大社は、大國主大神を主祭神とし、日本の心の故郷とも言いうる存在である。建造物などの形あるものは滅失新造を繰り返さざるを得ないけれど、人々が伝えようとしてきた「何か」は、古来一貫してつながっている。そしてその連綿としたつながりに、ほんの一部にせよ、ゼネコンが関わっている。

季刊大林は、他にもピラミッドや仁徳天皇陵などの復元を試みており、さらに人口氷河建設構想、火星居住計画、宇宙エレベータ構想なども発表している。これらもまた、過去と、現在と、そして未来と、人々が何かを紡ぎ伝えていく営みの一部である。

建設にたずさわる者こそ 夢を見、未来を語り、文化を育むべき。建設とは、本来そういう行為であるはずだ。(故大林芳郎名誉会長) おそらく建設業に従事する者の

多くが、似たようなスピリットを持っていて。職人も社長も、一人親方の零細企業もスーパーゼネコも違いはない。環境破壊、手抜き工事、談合・汚職などで世間を騒がすことが多く、労働環境は一般的に厳しいと言われる産業である。それでもなお、建設業に携わる者には、人々に寄り添い、何かを紡ぎ

金華山

例えば、私の母校である金華小学校、伊奈波中学、岐阜高校の校歌には、すべて長良川と金華山が謳われていた。幼い頃には、金華山の尾根伝いの山が自宅裏に接近していたせいで、山が恰好の遊び場であったが、山ではそれなりの礼節をわきまえていた。トイレ時には「山の神様ごめんさい」と言っただけで、用を足した位だから。マジシャンのミスターマリックは同じ町内で育ち、その裏山で修業して

伝えていく営みの一端を担う者の矜持がある。と言っても、大それたものではない。日々の市井の生活そのものである。過去・現在・未来の幾多の洪庵たちによる松明のりレーという大きな流れの中で、私も少しでも社会に貢献していきたい。



国島 真希子
昭和45年卒

いたそうだから、やはり魔力を備えた山だったに違いない。
やがて憂いを身につける年頃になると、学校帰りには、わざわざ橋の上を迂回し、金華山を見上げ、長良川を見つめ、涙を拭いた。「行く川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず」古文は好きではなかったが、口をついで出た。美空ひばりの、川の流れに身をまかせ、風に納得し、金華山を眺めては、「風林火山」く動かぬもの

山のごとし、と揺らぐ自分を、強くなれ、と叱咤激励したものだ。東京の大学に通うようになる。当たり前のようにあった山川の光景が見えず、落ち着かない不安を重ねたのか、「やっぱり私は岐阜が好き」と卒業後はさっさと岐阜に戻った。

そして、歯科医としてオフィスの設計に関わると、五台の治療椅子のすべてを、山を臨める様に並べた。私なりの癒しの空間作りであった。階上の自宅も、壁面は全面窓で山に開放し、鳥の囀りや、山からの匂いに慣れ親しんで暮ら

してきた。どこに行っても山城を戴いた金華山を目指せば、迷うことなく家に帰ることが出来る。木曾川を超えて金華山が見えてくると、あー帰ってきたな、と思う。時に、山ガール風に汗を流して岐阜城まで登れば、多くの野鳥やリスが間近で餌を啄ばむ。そして今では、金華山と長良川を同時に眺める高層に部屋を得て、時々年齢に相応しくゆるりとした時を過ごす事にした。眼前の金華山は、これからもずっと変わらずそこにあり続ける事を想いながら。

目標は甲子園 目的は人間形成

平成二十三年夏、第九十三回全国高等学校野球選手権大会（甲子園大会）に岐阜県の代表校として私の赴任先である関商工高校野球部が初出場を果たした。私が教員になって十五年目。関商工へ赴任



北川 英治
平成2年卒

して八年目の出来事であった。創部六十五年の歴史がありながら、一度も甲子園に出場していなかった学校が、甲子園に出場するにはどうしたらいいのか、真剣に考えた。まず、生徒が「本気で」甲

子園へ行きたいと思っていない。「できれば」行きたいレベルにとどまっていた意識をどう変えていくか。目標達成が絶対であると腹をくくれば、そのための方法を考える。すると未来は固定され、未来から現在へ時間が向かってくる。目標達成意欲が弱ければ、できなかつたときの言い訳を用意する。一般的には、多くの人の考え方が後者のようである。

甲子園常連校や名門や古豪と呼ばれる学校は、歴史に精神（スピリット）が入っている。「負けられない」「甲子園に俺たちも行くんだ」という本気の気持ちでそれらの学校にはある。故に、簡単に負けないうし、相手にプレッシャーを与えられるのだと思う。一方、一度も甲子園出場経験がない学校では、残念ながらその精神（スピリット）がない。どうしても目標達成意欲が弱くなりやすい。そこで、私は関商工にこの精神の代わりに「心」を養おう、鍛えようとしてきた。つまり、「人間力」である。

この「人間力」をつけさせるために、練習はもちろん、学校生活や

日常生活において「気付き」「準備」「徹底」を毎日、生徒に口酸っぱく伝えてきた。考え方や価値観を示していくことで、生徒はどんどん脳力（考え方）が変化してくる。指導者と生徒との信頼関係は絶大なものとなり、もの凄い組織力が形成される。そのためには、指導者も自己研鑽を行い、成長していく努力を怠ってはならない。生徒が指導者を尊敬し、生徒の心のコップが上を向いている状態で指導できなければ、昨今社会で問題になっているスポーツ指導現場での指導者と選手との間の軋轢を生むことになる。

「野球の最高の練習の場は日常生活にある」という言葉の如く、日常生活でそこまで指摘するか、というくらいの細部にまで指導を入れ、日常生活の重要性を全体の前で話してきた。部活動の時間は、せいぜい三〜四時間で、一日二十四時間の六分の一である。すなわち、六分の五の時間は日常生活に充てられているわけなので、その二十時間の間の「心」と「考え方」が重要なのである。自分の役割に気付き、

行動し、人のお役に立つ。こうした積み重ねが人間力を高めることに繋がり、結果的に甲子園に行けただけだと思っている。目標達成のみの追求が成功の未来へ導いてくれる確率は低い。むしろ、「今の心」を磨く方が成功の未来が近づいてくるのではないか。「念ずれば花ひ

桂川光正君を悼む

第一印象は最悪だった。高校受験の朝、体育館で隣に並んだのは綺麗な女生徒。ドキドキしている僕におかまもなく、振り返って彼女に話しかけるギョロ目の男。「なんだ、その横柄な口の利き方は!!」やたら、声の大きなやつだった。昼休み、隣の男女クラスからやつの声が聞こえてくる。日々不条理を生きる男子クラスで、怨念が沸騰する。

二年生で入った演劇部に、彼がいた。相変わらず横柄なやつだったが、不思議に憎めなくなった。下宿を訪ねると、「朝日ジャーナル」

らく」である。

最後に甲子園出場に際し、多くの岐阜高校卒業生の方々から御厚情を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。今後も生徒達と一緒に成長し、成幸をつかみ取るべく日々精進して参ります。

小池 秀男
昭和45年卒



や「世界」があった。

三年生で同じクラスになった。文系唯一の男子クラス。スネに傷もつソレ者集団で、まるで動物園。飼育係は、かのガンタ。やけくそで「エリートクラス」を僭称した。WやらKやら彼やら僕やらは、一人十円を出し合い「少年マガジン」を購入して、教室で回し読み。「明日のジョー」に心震わせ、読み終わると、大声で「誰か読みたい人ないか。」

貸出料十円で六人に貸せば、次週号はタダで読めた。永久無料購読システムが完成した。

大学に進んだ夏休み、Wとともに彼の実家である下呂の宿に泊まった。未明、酔っぱらって温泉につき、寮歌を高唱した。「学問としての歴史に興味なんかあるのか」とからんだ僕に、「いや、オレは、人間がどこから来て、どこへ行くのかを知りたいんだ」思いがけず真摯な声で、彼は言った。

結婚式初めて見る新婦は飛びつ切りの美人。やつにしては上出来以上だ。やつかみだろうか、暴露される大学時代の「悪行」の数々。

可哀相になって、用意したスピーチをやめて、高校時代の彼をほめた。

去年の三月、訃報を聞いた。信じられなかった。無沙汰の日々を悔いた。

「人間はどこから来て、どこへ行くのか」

君の口から答えを聞きたかった。日本が独立した年に生まれ、高度成長の時代に人となり、バブルとその崩壊を経て、デフレの時代にリタイアを迎えた僕らも、気がつけば「残りの年月」を数える年齢になっていた。桂川光正君をはじめ、少し早く逝ってしまった学友たちを思うと、その客気あふれる時代を共にしたが故に、痛ましさ胸に来る。

あの時代に読んだ本に見つけた言葉を、呪文のように唱えながら、今しばらく僕らは生きて行こうと思う。

「死者を死せりと思うなかれ／生者のあらん限り／死者は生きん／死者は生きん」

十年の後、 魚留滝にて

また十年の時が過ぎ、私たちは等しく還暦を越えた。勤務先の社名が変わり、公的機関を異動し、自営の業態も時に変わり、大きくもなった。そして、子息の結婚を喜び、孫が誕生する傍らで、親や友を見送った。

「人生、山あり谷あり」という感慨は山谷を俯瞰した言葉。分け入る谷は、もつと豊かで体感的なもの。もちろん苦難に充ちてはいるが、水飛沫を上げ、岩を攀じ登って遡る限り、薫風は頬を撫でること止めない。

誰ひとりとして、同じルート、同じ景色の中を遡ることは無いのだが、誰もがこの魚留滝に立ち至った感慨がある。またの名を魚止滝、懸崖から凄まじい勢いで落下する水流が大きな釜を成し、溪魚が遊弋する。見上げれば山毛櫨の新緑、碧空に、見果てぬ頂きが窺える。



渡邊 善治郎
昭和45年卒

ある者は、苦も無く滝を突破し、源頭を目指したという。そこには、幻の溪魚が太古のままに戯れ居り、またあたかも高天原の如き雲上の楽園があるのだろうか。そしてまた彼は、見果てぬ頂きに辿り着くのだろうか。

滝を越えるには、少し戻り、緩やかな傾斜を露岩や灌木を手掛かりに高みに至り、樹林帯を横切りながら滝上に行くのが安全だ。でも彼は、これまでのように真つ直ぐに滝の岩肌に取りついた。そして中途で、手掛かりを失くし、進退が窮まった。冷え行く身体に急速に力を失くす両腕。下がるうにも、足場は見えないのだ。でも、岩肌にしがみ着く彼の姿を、無謀と嘲ることなど到底できない。

ここからゆつくりと、遡った谷を降りるのも良いだろう。同じ谷とは思えぬほどに、全く違う風景が拡が

る。苦勞した「通らず」の淵も、出会った大魚の感触だけが残っている。二輪草の可憐な白花に目を奪われ、山ウドを求めて寄り道してもいい。先人の遺した袖道を辿れば、山桜が今を盛りに咲いている。

我が人生の原点を見出してくれた 貴重な経験

現在はトヨタ自動車に勤務し愛知県に在住しています。振り返ると既に人生の大半が愛知県での生活になりましたが、緑が多く、清流のある山河豊かな故郷の岐阜県を懐かしく思い、高校時代に出会った諸先輩や友人が今でも自分の財産だと思っています。

高校では硬式野球部に所属し、授業終了後に練習が始り、日が暮れた後はランニングが続く毎日、テスト期間を除いては数えるほどしか休みが無く、高校生活の三年間は野球一色の日々だったことを思い出します。

さて君はどうする、と問われたら、まずはゆっくりと煙草を喫い、此処に在ることを感謝してから、歩き始める心算だと。それより、折角集まるのだから、一献傾けながら、来し方でも語り合おうじゃないか。



廣瀬 寛
昭和55年卒

何と言っても一番の思い出は、二年生の春に選抜高校野球大会に出場し甲子園球場でプレーできたことです。選抜大会出場校の選考は一年生の秋に行われた東海地区大会の戦績が考慮されて決定したのですが、実を言うと私自身この大会に勝てば甲子園に行けることを認識しないでプレーしていました。この時、岐阜高等学校は十六年振りで甲子園出場を果たしましたが、その後の出場機会はありません。勝ったから良かったものの負けていれば半世紀近く出場していないこととなり、自分自身が後悔するこ

とになったのではと思っています。当時三年生の諸先輩に感謝しています。

誰もが経験することができない憧れの甲子園球場でプレーできたことで自分自身にも野球への自信が芽生え、進学して大学野球の聖地である神宮球場でプレーをしたという目標に繋がり、最終的にアマチュア野球の最高峰である社会人野球でプレーすることができました。

社会人野球選手として現役を離れた際にトヨタ自動車野球部のマネージャーを拝命し、二年後には日本野球連盟へ出向し一九九二年のバルセロナオリンピックより正式種目になった野球競技の全日本チームマネージャーを勤め、銅メダル獲得に貢献することができました。世界の野球（特にキューバ）を間近に見る貴重な経験をさせてもらいました。

トヨタ自動車野球部チームに復帰した後はコーチを経験し、二〇〇三年から二〇〇五年まで監督を務め、二〇一二年より野球部長を拝命しています。硬式野球部は弊社

運動部の重点強化部として位置づけられ、社会人野球の二大イベントである都市対抗野球大会及び社会人野球日本選手で好成績をあげ、従業員に明るい話題を提供することが求められています。

私にとって野球人生の原点である甲子園球場でのプレーがあったからこそ、こうして現在も野球に関する仕事が続けられているのだと思っています。

私が歩んできた人生における野球は、目標を明確にして進むこと、課題を創出し対策を練って実践すること。結果が伴わない場合も常に目標達成に向けて粘り強く諦めないことの大切さを教えてくれました。

目標に向かって前進することを常とし、修正を要する時には多少の振り返りはするものの、人生を振り返って何かに向かうことが少なかった私に、その機会を与えてくれる依頼をいただきました。

それは、私が出場した第五十回選抜高校野球大会から三十年後の第八十回選抜高校野球大会から甲子園球場で行われる高校野球の解

説の要請でした。甲子園球場でプレーしたことさえ幸せなことであるのに、三十年の時を経て解説者として野球人生の原点である甲子園球場に再び戻ることのチャンスをいただきました。

実は甲子園球場に足を踏み入れたのは選抜出場以来三十年振りでした。野球を続けてきた関係で、これまで様々な球場に行く機会があったものの何故か甲子園球場に行く機会がありませんでした。高校時代にフラッシュバックしたような感覚になり、改めて神聖な球場だと感じたのを今でも覚えています。

論語に「五十にして天命を知る」とあります。

この一文は「五十歳になれば、どんな人も自分の能力を冷静に自覚することができ、これまでの人生を振り返って自分の役割を見出せる歳だから更に実りのある人生にするよう精進しなさい」ということだそうです。

この解説をする仕事をいただいた際に自分なりに考えたのです。

これまでの我が野球人生が甲子

園でのプレーが原点であったのなら、今現在プレーしている選手達が、今後のそれぞれの人生に於いて甲子園球場が良き原点であることを感じられるよう役割を担いなさいということではないかと。

野球を通じて学んだ、目標を持ち失敗を恐れず粘り強く立ち向かう素晴らしさを選手達のプレーを通して伝える役割を担いなさいということではないかと。

本年、創立一四十年を迎える歴史ある岐阜高等学校で学び、人生の原点を見出せる機会を与えてもらえた高校生活三年間に感謝し、これからも会社生活及び野球に関する仕事に於いて百折不撓の精神で精進するとともに次世代を担う人材育成にも力を注いでいきたいと考えています。

甲子園球場に岐阜高等学校の校歌が流れる日が来ることを待ちわびながら。

ケンチャルマ

私は現在八丈島に住んでいます。殆どの方は来られた事が無いと思いますが、羽田空港から四十分と近く、空気や水も綺麗で自然が残された静かな良い所です。近年は関東圏だけでなく、東北、北海道からの観光客も増えていきます（関空からは飛んでません。関西の方は残念です）。

私が島に渡ったのは趣味で始めたダイビングがきっかけです。当時は家族、親戚、旅行、保険業界も敬遠するマイナーなレジャー産業でしたが、映画「彼女が水着に着替えたら」で大ブレイク！バブル経済の追風で、八丈島へのダイビング客は年々増加しました。

私は、インストラクターを養成するコースディレクターのレベル迄達成出来、店も高圧タンク充填施設を作り、売上は増加しました。が、バブル崩壊と共に、減少へ。

そこで建てたのが、島で初の全館禁煙簡易宿泊施設「ケンチャルマ」です。島民からは禁煙にしたらお客



日比野 行雄
昭和45年卒

様は来ないよ！と言われていましたが、現在は禁煙でないと泊まらないお客様が益々増えています。

さて、八丈は黒潮本流の真ん中に位置し、前線が掛かり易く雨が多く降ります。その為年中水不足になる事は有りません。その恩恵を受け多くの植物が生い茂り、プランクトンや魚の餌になります。それらが多くの魚の餌になっています。八丈島の海の中では、小笠原、沖縄、伊豆の殆どの魚が見られます。

私も、黒潮や自然の恩恵を受け生活して参りましたが、還暦を過ぎ、はっと気がつくとき、白い煙が出て来て頭は真白に、息子達は大学で

就職戦線真つ只中、私だけこんな長閑な島でゆつくり太鼓とコーラスを楽しみ暮らしているのは、正に竜宮城の様です。お陰様で、大きな病気も怪我也無くここまで来られたのは、皆様の力強い心支えが有つての事と、感謝しております。

こんな八丈島に住んでおりますが「是非「癒し」を求めて、いらつしやいませんか？」
八丈焼酎を酌み交わし、語り合います！

www.divingbase.com

激動の金融市場と ニューヨーク駐在を 経て



豊吉 之人
平成2年卒

一九九四年三月に東京工業大学工学部を卒業し、東京海上火災保険に入社しました。財務部門に配属され、資産運用の事務やシステムを担当しました。その後、東京海上アセットマネジメントに向し、国債や社債等債券のファンドマネジャーとして運用業務に四年間携わりました。二〇〇四年に東京海上日動火災保険に戻り、ヘッジファンド（HF）投資を担当することになりました。HFとは株式や債券を始めとして幅広い金融商品

率を目指して運用するファンドのことで、運用手法は千差万別です。HF投資とは世界に何千と存在するファンドの中から選別しながら精査し、投資をする仕事です。相手は海外の運用会社ですから、ニューヨークを中心に米国内や欧州など世界各国各地を飛び回ることになります。二〇〇〇年台半ばまではグローバルに景気も良く、HFの運用成績も好調でした。東京海上日動では当時、HF投資業務体制を拡大するためNYに拠点を開設することを決めたことを受

け、二〇〇七年八月にNYに派遣されました。駐在して間もなく金融市場に様々な異変が起き、HFの運用成績にも影響が始めましたが、極め付けのイベントはリーマンブラザーズの破綻です。正に現場に居合わせたわけですので、緊張感も高まりました。HF業界も金融危機のど真ん中にいましたので、投資家として資産状況の把握や資産保全のための回収作業、運用者との折衝等大変な日々でした。その後、ポートフォリオや投資プロセスを再構築し、リーマンショックを乗り越え、徐々に投資活動も再開しました。多くの運用会社を訪問したり、カンファレンスへ参加したりして情報収集し、必要に応じて投資判断を行い、投資をしてからはモニタリング業務という通常モードに戻り、NY以外にも頻繁に出掛けました。二〇一二年八月に帰国となりましたが、振り返ると金融市場の主要プレーヤーであるHFマネジャー達に日常から接し、経済やマーケットの動きを肌で感じる事ができ、また、幸

か不幸か金融危機への突入からその回復過程を目の当たりにしたこともある意味良い経験であり、非常に充実したNY駐在でした。現在は東京海上日動の財務部門にて、資産運用におけるアロケーションを担当しています。グローバルのマーケット環境について中長期の視点を持ちながらも、足元の市場の動きを注意深くウォッチし、安定的に収益を上げられるような最適な資産配分を考えたり、投資を実行したりする業務に従事しています。

趣味についても書いておきます。私の趣味は海外秘境旅行です。往復航空券のみ予約して、ホテルや交通手段など現地の人々が利用するレベルのものを行き当たりばつたりで利用する一人旅です。就職してからNY駐在前までの十数年間、毎年出掛けていました。旅行先は文化遺産や雄大な自然など素晴らしい観光資源がありながらも、インフラが未整備だったり交通手段に難がある等、一般的に認知度が低い国や地域です。今やインターネットであらゆる情報を容易に入手できますが、少し前までは必ず

しもそうでなく、とりあえず行つてから考えることも多かったです。例はアフリカのマリです。最近は、

子供も大きくなり自由な旅行は自肅中ですが、また新しい場所に出掛けてみたいものです。

私の人生を変えた 四年間のヨーロッパ生活

八木 宗彦
昭和45年卒

今から四十五年前、高校二年の夏に洋菓子店を経営していた父親から「大学へ行く四年間、ヨーロッパへ社会勉強に行つてはどうか」と提案がありました。大学へ行くつもりだった私はとも悩みましたが、洋菓子の仕事を通じて違った社会を見てみようと思い、行く決心をしました。一九七〇年に高校を卒業した私は、横浜から船でソ連経由ウイーン行き片道ツアーで出発しました。ウイーンで初めて一人になった時に十八歳の私には外国人がとても怖くて、地図を見ながら駅まで下を向いて歩いた事を覚えています。何とか汽車に乗ってパリに向かい到着後、駅の近くのカフェに入りコーヒートを注文しましたが、なかなか通じ



ない。仕方なく隣の人が飲んでくれたコーヒートを指さしてようやく飲むことができました。

こんなことがあってすっかり自信をなくした私はバーゼルの製菓学校に入ろうと思い、スイスに戻りました。この学校では日本人と同じ部屋で二ヶ月間生活し、彼の紹介でルツツェルンという町のお菓子屋さん「ポール・ルツテマン」

で働き始めました。スイスのこの地区の言葉はドイツ語なので、仕事に必要な数だけはしっかり覚えしました。このスイスでの生活体験で外国生活にも慣れ、その後イギリスへ行き一年半ほどロンドンのホテルで仕事をし、その後ドイツのフランクフルト市の最高級「ホテル・フランクフルター・ホッフ」で仕事を始めました。

その年の十月に四年に一度（オリンピックと同じ年に）世界料理コンテストが開催されることを知り、私も出展することになりました。私は「日本庭園」「母への誕生日ケーキ」「フレンチペーストリー」の三作品を作りました。結果は日本の所が良かったのか、金メダ

ルを受賞することができました。この四年間を過ごした原動力は「本物のお菓子を知りたい、学びたい」という気持。最初のうちは日本人というだけで、バッシング・いやがらせを受けました。とにかく一生懸命仕事をして認めてもらおうしありませんでした。「あいつはまじめで仕事ができる」という労働証書を得、またコンテストで結果を出したことも良かったと思いま

す。この四年間の滞在は、今六十一歳の私にとってただの四年ではなく、人生の半分以上の価値のある経験をしたという思いでいっぱいです。岐阜高校の在校生諸君もぜひ一年でも海外生活に挑戦してほしいと思います。

私の現況と 五十歳からの青春

五十歳の私ですが、今が人生で最も身体能力も高く鍛えられた身体です。高校一年当時、岐阜高校



末武 信宏
昭和55年卒

甲子園選抜大会出場を果たしましたが、高校時代は、自分自身、スポーツに縁も関心ありませんでした。

その私が、今や日本で最も多くのアスリートと関わる業務に就いています。岐阜大学医学部を卒業し第一外科入局して医師人生をスタートしましたが、患者の命をモノとして考える当時の封建医学に疑問を持ち、美容外科の世界へ飛び込みました。

当時は、国立大学卒業生としてはありえない冒険行為で、医局を退局する時、助教授から大学に所属していない医師は「クズ」と宣告されました。

美容外科の世界はまだまだ発展途上で美容整形と世間では言われていた時代でした。

幸い、指導医に恵まれ三三歳当時、史上最年少で日本美容外科学会認定専門医を取得し、二〇〇三年には第八八回日本美容外科学会会長としてトータルアンチエイジングというテーマで学会を開催させて頂いていただきました。

一五年前からアンチエイジング医療がスポーツ医学へつながることに気づき独自の研究をスタートしました。個人で行う地道な研究です。ソウル・バルセロナ・長野五輪日

本代表の青戸慎司氏と出会い、彼のトレーナーを務めたことがきっかけでスポーツ界への道が開かれました。

青戸氏と一緒に創立した「さかえクリニックTC(陸上部)」は二〇〇三年には日本選手権社会人出場者数 日本一、二〇〇四年には、アテネ五輪出場選手を個人チームとして史上初めて輩出しました。

プロボクシングトレーナーライセンスを取得し世界、東洋太平洋、日本タイトルマッチにもセコンドとして選手と一緒に闘う機会にも恵まれました。

二〇〇三年、阪神タイガース優勝時には松山進次郎選手をはじめ七名の主力選手のメデイカルトレーナー、川上憲伸投手をはじめドラゴンズの多くの選手を指導する機会に恵まれました。

大学を去る時、お前はクズの医師になる・・・と宣告を受けた私が、地道な活動と研究をただ一人、凄いと評価してくれたのが小林弘幸 順天堂大学医学部教授でした。彼の勧めで大学院入学、医学博士の学位を四九歳で取得。私の学位

論文のセカンドネームはソウル五輪金メダリストの鈴木大地医学博士です。

本格的なエビデンスがあるエクササイズやトレーニング普及を目指し、経済的に厳しい多くのアスリートを支援するため平成二二年トップアスリート株式会社を創立、友人の元F1レーサーと一緒にレーシングドライバーク育成プロジェクトを発足し、ジュニアからアスリート育成に努めています。

美容医療業務を行う傍ら、アス

リート支援法人代表としてスポーツ界に微力ながらお役にたてるよう精進しています。

人生、十代でも二十代でも決まりません。

五十歳の私は、毎日、アスリート以上のトレーニングを自ら課して精進しています。

勉強に追われ暗かった高校生活でしたが、私の青春が今、始まりました。

同窓生の皆さんも青春を創って下さいね。

私にとっての 首都圏同期会

「おう、久しぶり」「元気だったか？」
いつもの会話から始まる、首都圏昭和四十五年卒同期会「千仞の会」。それからはみんなが年齢を忘れて、肩書をちよつと横に置いておいて、当時の呼び名で呼び合い、食べて、飲んで、お喋りしての本当に賑やかな時間です。



板倉 裕子
昭和45年卒

在京同窓会総会の幹事年度のために四十九歳の時から年二回集まり始めて、今年で十四年目。司会の植村尚史さん、写真会の深尾光洋さん、ゴルフコンペの沼幸成さん、総合の世話係の北村清次さんと私は、それぞれ役割分担をしながら、首都圏在住一〇八名、首都圏外参加

下宿生

岐阜県は昭和四十九年の学校群制度導入まで岐阜市を含む中、西、

南濃と、飛騨と東濃、奥美濃の二学区制であったが、規制は緩く、学



鷺見 吉彦
昭和45年卒

者四十八名の永久幹事です。一介の主婦の私は、毎回、個々の皆さんにメールで近況報告をしながら集まりのご案内をお送りし、返信メールで様々な刺激を頂き、知らない世界を教えてもらっています。参加した皆さんから、「この集まりは、いろいろな職種の人が出て、小さな世界が出来ていて、世の中の動きが分かるんだよね。」「仕事で悩んでいても、みんなと話していると元気がもらえて頑張ろうと思えるんだ。」「高校時代なんて思い出したくもなかったから、こんなにみんなと楽しい時間が持てるなんて思いもしなかったよ。」「高校校の時には全く知らなかった人

だったけど、いろいろ話せて楽しかった。」「同窓会までに病気を治して、みんなと楽しく飲もうと一つの目標になっているよ。」「首都圏の人達は、自分の力で家や家族を持ち、甘えないで頑張っているから、話していて楽しい。」「今度また四人で飲む約束をしたよ。」「言った言葉を頂くと、「千仞の会」が首都圏の厳しい世界で突っ走ってきた同期の皆さんの、自分を飾らないでいられるストレス解消の場であるなら本当に嬉しいと思います。老親の介護問題を含むこれからの高齢社会を、この利害関係のない集まりで、情報を交換し合い知恵を出し合い、助け合っていけたらと願っています。

区を越えた入学者が岐阜高で一学年五百名中、十名前後いたと思う。通学は難しく、私も郡上八幡から出てきて学校の近くで下宿をした。

正門前にM下宿、旧体育館脇にA荘など専門下宿屋があり、十数名が一つ屋根の下で生活していた。入学式後、一人になって寂しさが募り、ど田舎から下に出たことを後悔しそうになった。だが、センチな思いは、上級生が必死に勉強する姿や難しそうな会話を見、聞き、生物の最初の授業で「君達は三億の精子の受精競争の勝者だ。」と話されたS先生他の個性的な教師陣、優秀な級友、更に毎日の予・復習のポリウムに圧倒され、消えてしまった。毎日の小テストや質問に備えて、ひたすら暗記に努めた。還暦を過ぎて赤尾の単語帳や山貞の英文法構文が出て来るのは、脳に刷り込まれた結果だろう。

下宿に風呂は無く、銭湯通い、食事は質素、三年間朝食の目玉焼きは変わらず、カレーや肉料理、下宿仲間お裾分けの田舎からの朴葉寿司などはご馳走だった。食事の無い日は近所の中華や大衆食堂、

たまに柳ヶ瀬へ出かけた。親許を離れての生活には解放感があり、勉強の傍ら、図書館や自由書房、大衆書房で見つけた大江健三郎や倉橋由美子、北杜夫、庄司薫などの耽読、学生運動など徹夜の議論、飲酒や喫煙の真似事、校則廃止のビラ貼り、憧れの女生徒談義と、児童的でも真剣に何かを模索をしていた日々だった。下宿部屋は放課後の溜り場、定期試験ヤマかけ対策の場となり、新しい友人が増えていった。シャンプーは女々しいと石鹸での洗髪に拘ったK君、飛騨までボロ自転車で帰った奴、夜のプールで泳いだ夏、出前ラーメンの昼食、同窓会で旧友と会う度に下宿の思い出が戻ってくる。

高校から下宿の負担、心配をかけた両親には感謝してもし尽せないと思っている。